

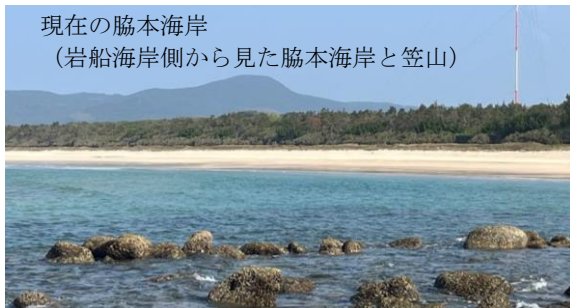


脇本海岸 渚だより

NPO法人
脇本海岸ウミガメ・シロチドリ会
第5号（期間：2023年1～3月）

（1月）白砂青松の会 開催

「白砂青松の会」とは、三笠中学校同窓生が還暦を迎えたときに脇本海岸に松を植樹した学年（昭和27～49年卒のうち15同窓生）の代表者と海岸域の集落区長からなる会議体の名称です。昭和40年代の美しい松林を取り戻すべく、関係者が一体となって活動してきており、2022年6月に正式名称となり、当NPOがこの会の代表となり事務局も担当することになりました。1月28日に今年度2回目の会合を開催し、市水産林務課の係長にも参加いただき海岸全体の防風林を一括管理していく仕組作りを議論しました。まだまだ多くの課題があるため官民協力して解決していかなければなりません。防風林の課題や活動の詳細についてはNPOのFacebook ページ (<https://www.facebook.com/kamechidori>) に掲載しています。



（2月）ウミガメが安心して産卵できる砂浜の整備

堤防や海面上昇などの環境変化により砂浜が減少し、残されたわずかな砂地には草木が繁茂することでウミガメが産卵できる場所がさらに減少しています。昨シーズンは、強い草木根のために穴を掘れずに、産卵せず帰海したケースが多数確認されました。産卵できる砂地の面積を広げるために、NPOが作業委託して海岸全体の砂浜に繁茂する草木を根から除去する10日間の作業を行いました。

また、昨年の台風により、約140匹の孵化直後の子ガメが流された愛宕川河口の孵化場を移動して新設し1mほど盛り上げました。重機の作業は前田組、掘り起こした草木根の除去作業は川畑産業が主に担当し、阿久根市市民環境課職員にも作業協力をいただきました。

（NPO作業員；大川内、石澤、落合里砂、本脇）



愛宕川河口付近に新設した孵化場

（2月）ハマグリ保護の取り組み開始



脇本海岸は天然ハマグリが自由に採れる海岸として広く知られ、通年で潮干狩りの客が訪れます。特に4、5月のシーズンには1日100名以上となり、SNSなどで情報が拡散されるため、市外からも多く訪れ、稚貝まで採っていくことが確認されています。地元の人たちの間では最近ハマグリが少なくなったという話を聞くようになり、このままの状態が続くと近いうちに絶滅してしまう恐れがあります。貴重な天然のハマグリが絶滅しないよう、まずは写真のようなポスターを海岸掲示板に出し注意喚起することにしました。

（表より続く）ハマグリは絶滅危惧種に指定されており、日本の海岸で天然ハマグリが採れる海岸はほとんどなくなっているため、脇本海岸は日本でも貴重な海岸です。絶滅する前に手を打つべく、まずは個体数の調査を鹿児島大学水産学部山本教授の協力を得て開始しました。2月11日に鹿大が最初の現地調査を行い、2月、3月にはNPO会員、会員の知人、鶴翔高校の先生、生徒も協力して本格的な採取調査を行いました。今後、毎月定点観測の採取調査を行い、年間を通じた個体数の変化などのデータを取ることで、棲息の全体像が明らかになると期待します。調査結果に基づき保護策を見出していくことにしています。



（NPO調査担当；大川内、石澤、宮内、本脇）

（3月）ななつ星の脇本海岸観光プラン開始

3月18日からJR九州の豪華列車“ななつ星”の脇本海岸観光プランが始まりました。海岸の美しさと、自然と絶滅危惧種を保護する活動がJRから高く評価されたためです。主に本州からのお客様は海岸に出るなり美しく広がる海と白い砂浜に感嘆の声を上げられ、そこにウミガメやシロチドリが産卵に訪れることにさらに感動されます。一方、捨てられた多くのゴミが絶滅危惧種を苦しめていることや砂中にマイクロプラスチックが多数存在することがわかり、お客様からは「自然環境を護るのは大変と思いますが頑張ってください」の言葉を頂いています。美しい自然と貴重な動物を人間が積極的に守る時代になっていることを多くの人に実感してもらうこともNPOの重要な活動と考えます。これから海外からのお客様も来ることが予定されており、脇本海岸を世界にもアピールできるよう準備を進めます。



折口駅から海岸へ



豪華バスで牛ノ浜駅へ



海岸の景色を楽しみながらウミガメ保護活動を聞く

（説明；大川内&石澤、マイクロプラスチック回収デモ；本脇）

毛糸編みのNPOマスコットができました。本脇理事の義母 92歳の川原和子さん作です。

理事長より
「シロチドリは産卵しています。カメは孫・曾孫の制作をお願いしました。彼らがNPO事務所で皆さんをお迎えします」

